

# 平和文化



2019.3 No.200



公益財団法人 広島平和文化センター  
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号  
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp  
平成31年(2019年)3月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

## 第八回 平和首長会議 国内加盟都市会議 総会の開催

昨年十一月五日、六日に、第八回目となる平和首長会議国内加盟都市会議総会を、岐阜県高山市において開催しました。

当会議は、平和首長会議の国内における取組の充実を図るため毎年一回開催しており、今回は全国から九十一自治体・百四十八人(うち首長三十九人)が出席しました。

### 開会

平和首長会議会長の松井一貴(まつい かずき)広島市長は開会挨拶において、「平和首長会議の加盟都市が力を合わせて、為政者が理性と洞察力を持って核兵器廃絶に向かって行動する後押しをする環境づくりに全力で取り組んでいきたいと考えています。皆様には、今後とも『絶対悪』である核兵器の廃絶と、世界恒久平和の実現に向け、御理解と御協力をお願いします。」と呼びかけました。

高山市プログラムピースフロム 高山」

次に、高山市プログラム「ピースフロム 高山」が行われ、自治体出席者に加え多くの高山市民が参加しました。

ソプラノ歌手独唱、高山市PR映像放映、高山市の平和の取組発表、海外姉妹友好都市からの平和メッセージ放映、高山市平和都市宣言の紹介、朝日中学校の平和の取組発表・合唱、平和首長会議青少年「平和と交流」支援事業「HIROSHIMA and PEACE」への高山市からの参加者による報告等が行われました。

### 会議Ⅰ(平和に関する取組事例の報告)

二日目の最初のプログラムとして、東京都多摩市阿部裕行市長、岐阜県瑞穂市棚橋敏明市長、兵庫県加西市西村和乎市長から、それぞれの自治体の平和に関する活発な取組事例の報告をしていただきました。

### 会議Ⅱ(報告、議案の審議、意見交換)、会議Ⅲ(総括)、閉会

次に、松井市長が議長を務め、議案の審議等を行いました。



第8回平和首長会議国内加盟都市会議総会で議事進行する松井広島市長(左)と田上長崎市長(右)

これに先立ち、平和首長会議事務局から平和首長会議メンバーシップ納付金平成二十九年年度決算や、被爆体験伝承者・被爆体験記朗読ボランティアを活用した平和学習等について報告を行いました。

次に、平和首長会議の小溝泰義事務総長が、世界情勢と平和首長会議の取組について報告しました。

続いて、議案の審議では、平和首長会議への加盟要請活動の展開、日本政府に対する核兵器廃絶に向けた取組の推進についての要請文の提出、広島・長崎の被爆者の思いが世界の市民社会で共有される環境づくりについて審議・了承されました。最後に、会議の概要等を盛り

## 目次

第8回平和首長会議国内加盟都市会議総会/日本政府に対する要請文の提出…平成31年追悼平和祈念館企画展「流燈」/平和記念資料館本館がリニューアルオープン ……	1	シモールハウスの常設展示を一部リニューアル ……	9
被爆体験伝承者等を海外に派遣/平成31年被爆体験伝承者等派遣先募集開始…被爆体験記「家族の運命を変えたあの日」(末岡昇) ……	2	ハンガリー等でのヒロシマ・ナガサキ原爆展開催/ウェブ会議システムによる海外への被爆体験証言 ……	10
ヒロシマ・ピースフォーラム/平和首長会議海外加盟都市のインターンを受け入れ…写真展「50の都市-50の軌跡」/国際人道法アジア・大洋州地域会合への出席…子どもたちによる「平和なまち」絵画コンテスト/中国人民平和軍縮協会代表団の受入れ/「広島・長崎講座」開設大学への支援…オバマ財団主催ワークショップへの参加/被爆体験の継承にご協力を…資料調査研究会研究発表会/研究報告第14号を発行/	3	インドネシア地震被災者救援市民募金(ご報告)……	11~12
	4	国際フェスタ2018/2019年ヒロシマ・メッセンジャー決定 ……	13
	5	平成30年7月広島県豪雨災害義援金(ご報告)/JICAサロン@タイ/「世界を知ろう!」「Have a Natter!」 ……	14
	6	平和について思う「核絶対否定の真理の共有」(核兵器廃絶をめざすヒロシマの会 森龍春子) ……	15
	7		16



日本政府に対する要請文の提出(左手前から高原高山市市民活動部長、田上長崎市長、松井広島市長、辻外務大臣政務官)

第八回国内加盟都市会議総会での決定に基づき、昨年十一月九日に、松井一貫広島市長(平和首長会議会長)、田上富久長崎市長(同副会長)、高原透高山市市民活動部長(総会開催地の國島芳明高山市長の代理)が外務省を訪問し、核兵器廃絶に向けた取組の推進について安倍晋三内閣総理大臣宛ての要請文を辻清人外務大臣政務官へ提出しました。

### 日本政府に対する核兵器廃絶に向けた取組の推進を求める要請文の提出

込んだ総括文書を採択して閉会しました。  
(平和連帯推進課)

辻政務官は「核のない世界を、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆の実相を伝えるため、毎年テーマを定めて企画展を開催し、被爆体験記を紹介しています。本年は、「流燈—広島市女原爆追憶の記」に収録された追悼記を中心に、企画展を組み立てました。

戦局の悪化に伴い、一九四五年(昭和二十年)四月から、現在の中学生以上の生徒は授業が中止され、食糧生産や軍需工場に動員されました。広島原爆では約七千二百人の生徒たちが犠牲となりました。中でも、爆心地に近い屋外で建物疎開作業をしていた生徒の被害は甚大で、一、二年生のほとんどが動員された広島市立第一高等女学校(通称市女、現在の市立府入高等学校)は六百六十六人の生徒が亡くなり、最も多い犠牲者数となりました。

### 平成31年 追悼平和祈念館企画展

## 流燈 広島市女原爆追憶の記

期間 平成31年1月1日～12月29日  
場所 追悼平和祈念館 地下1階  
情報展示コーナー  
入場 無料

という目標は、日本政府としても共有している。平和首長会議の考え方をしっかり受け止めながら頑張っていきたい。両市長が世界で先頭に立って取り組んでいることを心強く感じている引き続き、よろしくお願ひしたい。」と述べられました。  
(平和連帯推進課)



右下が1957年(昭和32年)に刊行された「流燈」。これまで続編や再製作版が刊行され、貴重な記録として読み継がれている。

十三回忌を迎えた一九五七年(昭和三十二年)八月、遺族が追悼集「流燈」を刊行しました。追悼集には、学徒動員から終戦までの経過が克明に記録され、遺族による追憶の記とともに生徒らの遺稿も掲載されています。追悼平和祈念館の三面シアターでは、被爆死した四人の女学生について父母らがつづった追悼記を中心に、分かりやすく映像化しています。当時の宮川造六校長の言葉や、水槽に逃げ込んだ生徒をかばうように覆いかぶさったまま亡くなった森政夫先生の逸話も紹介しています。

市女の生徒だった娘の被爆死について広島を訪れる修学旅行生に語り続けた、故坂本文子さんと、市女の二年生に在籍し、八月六日は体調不良のため難を逃れた矢野美耶子さんの貴重な証言動画も挿入し、体験者の言葉を通して、切実に平和への思いを伝える展示となっています。会場では、二十八編の手記とともに、「流燈」の初版本、形見となった市女のセーラー服などを展示しています。

## 平和記念資料館本館が平成三十二年四月二十五日にリニューアルオープン

平成二十九年から閉館していた平和記念資料館本館は、改修工事及び展示整備を終え、平成三十二年四月二十五日にリニューアルオープンします。本館では、被爆者の遺品、被爆の惨状を示す写真や資料を展示し、「八月六日のヒロシマ」を紹介するとともに、被爆者や遺族の今日までの苦しみや悲しみなどを伝えます。なお、リニューアル後の観覧料の変更はありません。また、展示替え作業等のため、前日の四月二十四日は午後二時に閉館します。(入館受付は午後一時三十分までです。)

(平和記念資料館 学芸課)

【お問い合わせ】  
 国立広島原爆死没者追悼平和祈  
 念館  
 ☎(082) 543・6271

## 被爆体験伝承者と被爆体験記朗読ボランティアを海外に派遣しました

昨年十月二十二日～二十七日にフランスで被爆体験記朗読会を、十一月三日～七日にイギリスで被爆体験記朗読会と被爆体験伝承講話を実施しました。

フランスでは、北部のノルマンディー地方の港町ルアーブルで被爆体験記朗読会を開催しました。第二次世界大戦末期、ドイツ占領下のノルマンディーで、歴史上最大規模の上陸作戦（ノルマンディー上陸作戦）が敢行されました。この時、ドイツ軍に対して行われた連合国軍の大空襲は、市民が暮らす街も破壊し尽くしました。

今回、ルアーブル大学で、アジアの社会・経済を専攻する学生が中心となって開いたシンポジウムに招かれる形で、被爆体験記朗読ボランティアが朗読会を開催しました。戦災と復興の

歴史を持つ街だけあって、学生たちは平和や人権に大変関心が高く、朗読会にも企画段階から取り組んでくれました。また、原爆詩の朗読や質疑応答に積極的に参加していました。



黒い雨について説明している様子（ルアーブル大学）

また、朗読会に先立ち、ルアーブルから電車で二時間の所にあるカーン平和記念館及び同館で開催中の「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を視察しました。同館の常設展示は、第二次世界大戦やノルマンディー上陸作戦を中心に、二十世紀の戦争や世界情勢を紹介しています。

イギリスでは、マンチェスター市とコベントリー市の二都市で、小学生や地元の核廃絶キャンペーンを行うNGOに参加している学生などに向けて、三回の朗読会と被爆体験伝承者

による講話を行いました。イギリスでの開催には会場準備などに難しい点もありましたが、朗読ボランティアや伝承者は日本での活動経験を活かし、イギリスの人たちに「ヒロシマの心」を伝えようと懸命に取り組んでいました。



被爆体験伝承講話と朗読会を実施した小学校の児童と共に（マンチェスター）

また、マンチェスター市と近郊のオールダム地区、コベントリー市の各首長への表敬訪問や、各市の平和行政の関係者などの意見交換も行いました。マンチェスター市長からは、市民との協働と多様性の実現に対する強い思いを伺いました。

コベントリー市では、第二次世界大戦中に受けたドイツ軍の大空襲の爪跡が無惨に残る旧大聖堂と、その横に一九六二年に

建設された新大聖堂を見学し、痛ましい歴史とそこからの復興について学びました。  
 （原爆死没者追悼平和祈念館）

## 平成三十二年度被爆体験伝承者等全国派遣の募集を始めました

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆者の体験や平和への思いを次世代に語り継ぐため、全国（広島市を除く）の小・中学校、高等学校、自治体その他の団体が行う平和学習の場に、被爆体験伝承者と被爆体験記朗読ボランティアを無料で派遣する「被爆体験伝承者等派遣事業」を、平成三十一年度から実施しています。

事業の反響は大きく、平成三十一年度の派遣件数は三百六十七件（被爆体験伝承講話二百七十七件、被爆体験記朗読会三十六件）、約五万人の児童生徒等に被爆体験を伝えることができました。

二年目となる平成三十一年度の派遣先募集は、平成三十一年一月二十一日から開始しています。



被爆体験伝承講話の様子

- 派遣先の決定  
原則、受付順で決定します。
- 派遣開始  
平成三十一年四月以降、順次派遣します。
- 実施内容についての詳細  
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館ホームページ（<https://www.hiro-tsuikokenkan.go.jp/>）に掲載しています。

海外派遣については、派遣要望先を調整し、平成三十一年度と同様に一カ国程度実施する予定です。

【お問い合わせ】  
 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館  
 ☎(082) 207・1202



## プロフィール

〔すえおか のぼる〕  
昭和12年(1937年)生まれ。原爆投下時、爆心地から800メートルの西新町(現在の土橋町)に祖父母をはじめ10人家族で住んでいた。被爆当日、まったくの偶然により家族の生死が分かれた。8月18日、両親と私の3人で、西新町の焼跡で祖父母の遺体を焼いた。原爆の悲劇は語り継がなければならないと思う。2004年ピースボランティア。2016年被爆体験伝承者。2017年被爆体験証言者。

## 被爆体験記

## 家族の運命を変えたあの日

本財団被爆体験証言者

末岡 昇

## 原爆以前の私たちの家族

原爆が投下された昭和二十年(一九四五年)、私達一家は父の転勤により、五月か六月に東京から広島に移りました。急な転勤でした。父の会社は、ある大手の化学工場でした。家族は父の茂、母の喜久子、七歳だった私、二歳だった妹の悠紀子の四人家族でした。

父の実家は西新町(現在の土橋町)。平和記念資料館のすぐ近く)にあり、古くから西新町で大きな旅館を営んでいました。転勤が決まると、私達一家は家財道具をまとめて会社の社宅あてに送り出し、あわただしく東京を後にしました。しかし、当時の貨物輸送はすべて軍事優先で、家財道具はいつ到着するのかわからない状態でした。舟入にあった社宅で生活する上での必需品にも困った私たちは、西新町の祖父の家に一時的に身を寄せるしかありませんでした。

昭和二十年当時、すでに祖父の旅館は営業停止の状態でした。祖父の家では、祖父の栄吉、祖母のりょう、父の妹たち・長女の初代、体の弱かった露子、県庁に勤めていた富士子の五人家族が住んでいました。そこに私たち家族が加わり、さらに七月二十日には私の弟の裕が生まれて、祖父の家は十人の大家族になりました。

私たち家族は、あの日の前日の八月五日までは、西新町でごく普通の市民生活を送っていました。

## 偶然が家族の運命を分けた

広島も空襲の心配があるので、七月の末に、母は生まれたばかりの弟と幼い妹だけを連れて、宮島の近くの親戚の家に一時避難をしました。勤めのある父と学校がある私は広島に残りました。

偶然が私たち家族の運命を変えました。八月五日は日曜日でした。私は一人で母のところへ遊びに行くことにしました。祖父はこれに頑固に反対したので、私は「必ず五日中に帰ってきて、六日には登校する」という約束をしました。しかし、久しぶりに母に会い、生まれたばかりの弟を見たりしているうちに、祖父との固い約束を破り、五日中には帰るそびれてしまいました。

翌六日の朝、親戚の家の前の海辺に出て、ぼんやりと、海上はるか二〇キロメートル先の広島を見てみると、突然、見たこともない強烈な閃光を目撃しました。続いて十秒ぐら以後に「ドーン」いう

鈍い音が響きました。

あの閃光の瞬間、広島が壊滅して何万人もの命が奪われたのだと思うと、今も身の毛がよだつ思いです。

原爆が投下されたとき、父は爆心地から五キロメートル離れた工場に出動していました。その後数日間、父は祖父たちを探して何日も市内の焼け跡をさまよい、ついに瓦礫の下に祖父母と初代、露子の遺体を見つけたことができました。遺体が発見された時には、原爆投下から十日以上経っていました。

八月十八日、父と母と私は祖父の家の焼け跡に行きました。そして、瓦礫の下から半分焼けずに残っていた祖父母の遺体を見つけ出し、その場で火葬しました。遺体を焼くとき、母は



広島東警察署屋上から南を望む。目をさえぎるものは何もなく、広島瓦斯広島工場のガスホルダー、向宇宙品、そして広島湾に浮かぶ似島(広島市から海上4000m)が見えた。(平和記念資料館提供)

小声でなにか呟いていましたが、内容はわかりませんでした。母は「ほら、これがお爺ちゃんだよ」と言いましたが、目の前にある遺体が、五日の朝に玄關で見送ってくれた祖父だとは、私には信じられませんでした。なんだか魚の腐ったような臭いが強く印象に残りました。何十年もたった今でも、似たような臭いがかぐと、あの時の情景が鮮明に頭に蘇ります。

後年、父は肺がんで亡くなり、八月六日に父と一緒に家を出て県庁に出動した富士子は、いまだに行方不明のままです。

最後に、私たちの願い  
戦争中とはとても不安で不自由な生活でしたが、国民は家族同士いたわり合い、助け合って幸せな生活を送っていました。私の家族もそうでした。そんな家族を一時にして奪われたのです。今でも世界中のどこかで国と国との争いが起こっています。いつ核兵器が使われるかわかりません。絶対に核兵器は廃絶させなければなりません。これが私たち被爆者の強い願いです。戦後七十四年、戦争を知っている世代も少なくなりました。今こそ核兵器の悲劇を語り継ぐ輪を全世界に広げることが、核兵器廃絶につながる道だと固く信じています。

# ヒロシマ・ピース フォーラムの開催

本財団では、広島市と共催で、市民が「平和の原点」としての「ヒロシマ」を見つめ直し、原爆や平和について考え、どのように行動すればよいかを探索する機会を提供するため、「ヒロシマ・ピースフォーラム」を開催しています。本年度も広島市立大学の講座「広島からの平和学」と連携して、十月から一月までの間に全六回開催し、同大学の学生を含む約七十人が受講しました。

同フォーラムでは、被爆体験証言の聴講や、国際協力、学術、市民社会など多角的に核兵器廃絶と世界恒久平和について考える講座を用意し、グループ討議と最終回での発表により、受講者自身で考え、活発な意見交換ができる内容としました。

第二回目には、現地学習として広島市現代美術館の企画展「丸木位里・俊（原爆の凶を讀む）」の鑑賞と、比治山（南区）の被爆建物である「多聞院」や「頼山陽文徳殿」などの史跡を巡りました。

受講者からは、「原爆被害や平和を考える良い機会となった」、「グループ討議では若い人たちの意見が聞けて新鮮だった」等の感想が寄せられました。

また、第五回目には、平和首長会議行動計画に掲げる「核兵器禁止条約」の早期締結を求める署名活動を推進するため、「若者が考えるこれからのヒロシマ」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

パネルディスカッションでは、県内外で活動している若者五人が日頃の活動や核兵器廃絶に向けた取組を発表し、世界恒久平和の実現に向けて自分たちでできることについて、コーディネーターの広島市立大学広島平和研究所の水本和美副所長を交えて意見交換を行いました。

「ヒバクシャ国際署名」キャンペーンリーダーの林田光弘さんは、署名活動の目的や日頃の活動内容を紹介するとともに「核兵器廃絶を夢にはしていない」と呼び掛けました。

広島市立大学芸術学部二年の上本佳奈さんは、所属する平和研究サークル「S2 (Smile X Smile)」が行う碑めぐりガイドなどについて説明しました。

広島女学院中学高等学校・高校二年の庭田杏珠さんは、「記憶の解凍」プロジェクトの取り組みを通して被爆者の記憶を未来に継承していきたいと話しました。

災害との交流などを紹介するとともに、核廃絶のための運動を仲間と共に地道に続けていきたいと話しました。

盈進中学高等学校・高校二年の前原未来さんは、街頭署名活動や福島第一原発事故による被

動を起すことの大切さを訴えました。

会場は約百人の来場者で満席となり、「若い世代の活動や考えを聞いたことは非常に貴重で刺激的だった」、「安心してバトンを渡すことができる」など多くの意見や感想が寄せられました。

(平和連帯推進課)

## 平和首長会議事務局が海外加盟都市からインターンを受入れ

平和首長会議では、平成二十六年度から、海外の加盟都市の若手職員等をインターンとして広島に招へいし、事務局の業務に従事してもらう取組を行っています。今年度は、六か国・六都市から六人を受け入れ

ました。

インターンには母国の加盟都市に関する情報更新や未加盟都市の調査のほか、メールマガジンの原稿作成など事務局の様々な業務を体験してもらいました。また、インターンから自都市の平和の取組を本財団の職員等へ紹介してもらい、相互理解と連携強化の促進を図りました。

また、平和記念資料館、平和記念公園、原爆死没者追悼平和祈念館、放射線影響研究所の見学に加え、被爆体験講話の聴講、広島市の青少年との意見交換など



パネルディスカッションの様子

### インターン受入実績

国	都市名	人数	期間
ドイツ	ミュンヘン	1	H30. 6.18~H30. 7.13
カメルーン	フオンゴ・トンゴ	1	H30. 8.21~H30. 9.14
ブラジル	サントス	1	H30.10.22~H30.11. 2
イラン	テヘラン	1	H30.11.12~H30.11.28
ロシア	ボルゴグラード	1	H30.12. 3~H30.12.19
カナダ	モントリオール	1	H31. 1.16~H31. 2.13

も実施し、被爆の実相への理解を深め、平和への思いを共有してもらいました。

各インターンは帰国後、講演や青少年への平和教育を行うなど、広島で学んだことを基に核兵器廃絶に向けた活動を行っています。事務局では、このインターンシッププログラムを通じて、核兵器のない平和な世界の実現を願うヒロシマの心が世界に広まることを期待しています。



広島府の青少年に対して、テヘラン市の平和の取組を紹介するインターン

(平和連帯推進課)

### 写真展「50の都市 「50の軌跡」の開催

広島市の姉妹都市であり平和首長会議の副会長都市であるハノーバー市(ドイツ)の支援の



11月18日オープニングセレモニーの様子

もつて世界を巡回している写真展「50の都市・50の軌跡」を、昨年十一月十八日から三十日まで国際会議場一階エントランスロビーで開催しました。

この展覧会は、一九六八年にNPT(核兵器不拡散条約)が採択されてから、二〇一八年に五十年目を迎えたことを記念して、ハノーバー市とシュトゥットガルト市(ドイツ)のプロジェクト・オフィスによって企画されたものです。二〇二〇年までに世界の五十の平和首長会議加盟都市で開催し、都市の破壊や核兵器の保有に反対するメッセージを発信することを目指しています。広島市は八か所目の開催地となりました。

会場には、芸術家クラウディ



松井広島市長が観覧

ア・ディートヴィツヒが、日本の十都市を含む五十都市のアスファルトに残る様々な軌跡を撮影し、彩色を施した作品が展示されました。出会いの場所であり、人々のいさかみや不慮の事故など、様々な人間模様が繰り広げられる舞台でもある道路を、ディートヴィツヒは生活そのものを映し出す場所としてとらえています。そして、道路に残された一見がらくたにしか見えないようなかけらや跡にも都市に刻まれた記憶を見出し、忘れ去られないよう作品として記録に留め、都市の破壊、ひいては核兵器の保有に反対するメッセージを込めています。

国際会議場での恒例イベント「国際フェスタ2018」の

開催日を初日としたこの展覧会は、開催期間を通して二千人近くの来場者で賑わいました。

(平和連帯推進課)

### 国際人道法アジア 大洋州地域会合への出席

赤十字国際委員会(ICRC)からの要請で、昨年九月二十六日にジャカルタで開かれたICRC主催国際人道法アジア・大洋州地域会合の第二セッション「核兵器の道徳的側面」において、当財団の小溝泰義理事長が「核兵器のない世界をめざす市民社会の展望―平和首長会議の取組」と題して発表を行いました。

小溝理事長は、被爆者の被爆体験及び核兵器のない平和な世界を目指す「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」との訴えを強調し、市民社会の幅広い運動が核軍縮を促進した先例と、核大国の指導者が国際緊張の極まる中で核軍縮を実現した先例を紹介し、幅広い市民社会の協働と為政者のリーダーシップの重要性を指摘しました。そして、広島・長崎両市が主導す



小溝理事長の発表の様子

る平和首長会議が「核兵器のない世界の実現」と「安全で活力のある都市の実現」の二つの柱を活動の中核として取り組んでいる、世界平和実現のための活動を紹介しつつ、国、自治体とともに幅広い市民社会が力を合わせれば核のない世界の実現は可能であることを強調し、核軍縮を具体的に進めるために共に取り組もうと呼びかけました。

参加者(国際人道法の専門家、外交官、NGO等)からも活発な質問が寄せられ、核廃絶に向けた努力の必要性を多くの人と共有することができました。

(平和連帯推進課)

# 子どもたちによる 平和なまち、絵画 コンテストの開催

平和首長会議では、今年度加盟都市における平和教育の更なる充実を図ることを目的として、全加盟都市の六歳以上十五歳以下の子どもたちを対象とした「平和なまち」絵画コンテストを初めて開催しました。

加盟都市の子どもたちがコンテストへの参加を通して「平和なまち」について考え、そのイメージを絵に表現することにより、子どもたちの平和意識の醸成を図ることが目的です。この平和教育プロジェクトを通して、各都市でも独自のプロジェクト



最優秀賞：ロシア・クラスノダール市  
アナスタシア・スコベルツィナさん(9歳)



優秀賞：イラン・テヘラン市  
オシエン・メモプールさん(11歳)



優秀賞：日本・広島市  
世羅紗彩さん(7歳)

を立ち上げる契機としてもらいたいとの願いを込めて、新たな取組として実施し、世界十四か国二十九都市から四百六十九作品が寄せられました。

作品はいずれも力作ぞろいで、審査により最優秀賞一点、優秀賞二点を含む八つの受賞作品を選定しました。なお、最優秀作品は、平和首長会議が配布するクリアファイルのデザイン

として採用しました。今後様々な場面で活用していきます。  
(平和連帯推進課)

## 中国人民平和軍縮 協会代表団の受入れ

中国人民平和軍縮協会(以下、平縮会という)は、平和と軍縮を推進する中国の全国的組織です。

本財団と平縮会とは、昭和六十三年以来、三十年間にわたる相互訪問が続いています。平成三十年度は、十一月二十五日から二十八日までの日程で平縮会の代表団が広島と東京を訪れました。

広島滞在中には、本財団の会長である松井一實市長と面会しました。松井市長は、平和首長会議への加盟促進や核兵器廃絶に向けた取組への協力を依頼しました。これに対して、訪問団団長の安月軍(An Yuejun)平縮会秘書長は、日中関係の発展のため、両団体の交流と協力をより一層進めていきたいと述べました。

また一行は、平成二十九年度

広島市民平和友好訪中団の団員との懇談、平和記念公園や平和記念資料館の視察を行い、河野キヨ美さんの被爆体験証言の聴講を通じて、被爆の実相について理解を深めました。

このほか、広島の子どもの意見交換会に出席し、若者が考える日中関係について、率直に意見を交わしました。

その後、東京に移動した一行は、原水爆禁止日本協議会や、その他関係機関を訪問しました。

昨年は日中平和友好条約締結四十周年という節目の年に当たり、一行は日中友好の重要性について、幾度も述べておられま

した。今回の訪問受入れによって、今後も市民レベルの交流を継続していく意義を互いに確認することができました。  
(平和連帯推進課)

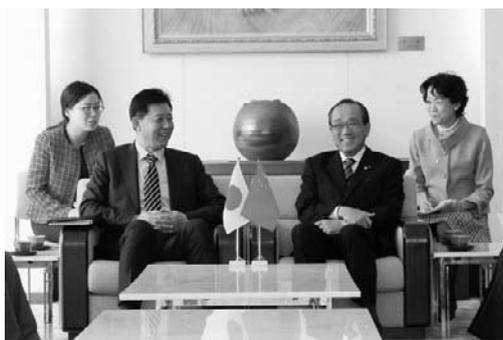
## 「広島・長崎講座」 開設大学への支援

広島市と長崎市は、被爆の実相や被爆者のメッセージを若い世代に伝えるため、それらを学術的に整理・体系化し、学問として普遍性を持たせた「広島・長崎講座」の開設を国内外の大学に働き掛け、その普及に取り組んでいます。

本財団は、昨年十一月から本年一月の間、次の二大学が広島市と長崎市で実施した平和学習に際し、プログラムの支援を行いました。

### デュポール大学(米国)

十一月三十日(金)から十二月九日(日)までの間、同講座を開設しているデュポール大学の学生十六人、教員二人の計十八人が広島市と長崎市で平和学習を行いました。同大学の広島訪問は今回で七回目です。



市長訪問の様子

一行は、広島市では平和記念資料館や平和記念公園、長崎市では岡まさきはる記念長崎平和資料館や浦上天主堂などを見学したほか、両市で被爆体験講話を聴講するなどして、被爆の実相について学びました。さらに地元大学生との意見交換なども行い、様々な角度から平和について理解を深めました。



平和記念資料館見学の様子

**慶北国立大学校人文大学（韓国）**

一月九日（水）に、慶北国立大学校人文大学の学生二十人、教員一人の計二十一人が、二〇一八年の同講座認定後初めて、広島市での平和学習を行いました。

一行は、平和記念資料館や平



ピースボランティアによる平和記念公園の案内

和記念公園の見学、大田金次さんによる被爆体験講話の聴講などを通して、被爆の実相について学びました。

（平和連帯推進課）

**オバマ財団主催アジア太平洋地域リーダーズデザインワークショップ ショップへの出席**

本年一月四日から六日までの三日間、米国ハワイ州ホノルル市で開催された「オバマ財団主催アジア太平洋地域リーダーズデザインワークショップ」に、本財団平和連帯推進課の職員が参加しました。

このワークショップは、日本

をはじめアジア太平洋地域の各界の若手リーダーを対象に、リーダーとしてのモチベーションを高めるとともに人的ネットワークを構築することを目的として開催されました。教育やITなど多様な分野で活躍している、インドネシアやマレーシア、諸島など十六か国・地域からの参加メンバー二十一人は、それぞれの活動を更に活発化、拡大させるために必要なスキルなどについてディスカッションを行いました。また、今後アジア太平洋地域においてリーダーシップを発揮していくために必要なアイディアを出し合い、オバマ前米国大統領の前でグループ毎に発表し、意見交換を行いました。

本財団の職員は、アジア太平洋地域の若いリーダーと、それ



フエウェルレセプションでのオバマ前米国大統領

それが解決したい課題等について意見交換を行うとともに、平和首長会議の取組について紹介し、今後の活動に対する理解と協力を求めました。

（平和連帯推進課）

**被爆資料・原爆死没者のお名前・遺影（写真）・被爆体験記募集 ご協力を**

広島平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝えるための貴重な資料として、被爆者やその遺族が保存しておられる被爆の遺品や被爆の痕跡をとどめる資料、写真等の収集・保管に努めています。

戦後七十年以上経過し、遺品や資料にまつわる詳細な情報の収集が次第に困難になっていきます。資料館では、核兵器廃絶のため、原爆がもたらしたさまざまな被害を将来にわたり伝えていきます。資料の寄贈について、ご協力いただけますよう、よろしくお願いいたします。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、原爆死没者のお名前と遺影（写真）、被爆体験記



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の体験記閲覧室

を収集・公開し、来館者に平和を訴えています。

原爆死没者が平成三十年八月六日現在で三十一万四千百十八人であることに対し、当館に原爆死没者のお名前と遺影（写真）をお寄せいただいている数は、平成二十九年年度末で、二万二千三百四十三人とどまっています。原爆で多くの人が亡くなった事実を伝えるため、ご協力をお願いいたします。

また、被爆者が自身が執筆された体験記は、被爆の実相を後世に伝える貴重な資料です。被爆体験に関する手記・日記・書簡、ご本人以外でも被爆者の御遺族・友人が書かれた追悼記を含みます。

お寄せいただいたお名前と遺影（写真）、被爆体験記等は永久保存するともに、当館で公開し、後世に伝えさせていただきます。

**【お問い合わせ】**

■被爆資料について—広島平和記念資料館 学芸課まで  
☎(082) 241・4004

■お名前・遺影、体験記について—国立広島原爆死没者追悼平和祈念館まで  
☎(082) 543・6271

**資料調査研究会研究発表会  
会員が研究成果を発表**

平成三十年十一月二十五日（日）、広島平和記念資料館資料調査研究会の研究発表会が開催され、四人の研究者が発表しました。来場者は約三十人でした。

**平和記念資料館資料調査研究会  
研究報告第十四号  
を発行しました**

平和記念資料館資料調査研究会の調査研究活動の成果をとりまとめた「広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告」第十四号を発行しました。

○石丸紀興いしまりののり会員（広島諸事・地域再生研究所代表）  
「特別法『旧軍港市転換法』適用都市における都市政策の展開と課題」と題し、占領下の都市政策について報告しました。

○高妻洋成たけつまよしなり会員（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）  
「広島平和記念資料館の展示環境」と題し、東館の展示環境調査結果などを報告しました。

○静岡清しずまきよ会員（広島大学大学院工学研究科客員教授）  
「広島原爆線量評価に果たした被爆建造物および被爆資料の役割（その2）」と題し、原爆線量評価に果たした被爆資料の役割の中で残留放射線の深度分布について報告しました。

**「執筆者と論文のテーマ」**

- ◆静岡清 広島原爆線量評価に果たした被爆建造物及び被爆資料の役割（その1）— 残留放射線の深度分布
- ◆高橋博子 アメリカの核開発とABC-C米原子力委員会と米科学アカデミー文書から—
- ◆竹崎嘉彦 被爆前後に米

軍が撮影した広島空中写真のモザイク化

- ◆直野章子 「トラウマ」からみる原爆体験—概念の系譜と応用可能性について—
- ◆水本和実 核兵器の法的禁止で見えた核軍縮の分水嶺—二〇一六年の核をめぐる動向と論調—
- ◆吉田幸弘 広島平和記念

資料館所蔵「原爆の絵」高画質デジタルデータを利用した複製画の制作

希望者には、先着順に百部を無償配布します。

**【お問い合わせ】**

平和記念資料館 学芸課  
☎(082) 241・4004



研究発表の様子

**シュモーターハウスの  
常設展示を一部リニューアルしました**

今から七十年前、米国の平和活動家、フロイド・シュモーター氏が日米のボランティアとともに広島へやって来て、原爆で家を失った人たちのために、「広島の家」を建てました。

「シュモーターハウス」は、コミュニケーションハウスとして建てられた、唯一現存する「広島の家」です。展示施設として改修し、



江波町の「モデルハウス」内部  
(シュモーター・富子氏寄贈、シュモーターに学会が寄託)

二〇一二年に広島平和記念資料館附属展示施設として開館しました。

このたび、シュモーター氏が撮影した鮮やかなカラー写真や、元住人の方々から寄贈された資料な

ど、新たに寄贈・寄託された資料や収集した資料を追加展示し、平成三十一年二月二十二日（金）、内容を一部リニューアルしました。

### リニューアルの内容

#### (一) 写真の追加 二十二点

- ・ シュモール氏が撮影した鮮明なカラー写真（「江波ヴィレツジ」の全景図、建設中の様子、モデルハウス、牛田町のアパートとゲストハウスなど）
- ・ 元住人の方々から寄贈された写真
- ・ 長崎に建てられた住宅の写真など

#### (二) 説明パネルの更新

「江波ヴィレツジ」の全体図、「モデルハウス」、牛田町のアパートとゲストハウスの説明などを追加

#### (三) 展示物の追加 五点

宛名に「シュモール住宅」と記載された封筒（複製）一点、建築図面（複製）四点

#### シュモールハウス（広島平和記念資料館附属展示施設）

江波二本松一丁目二番四十三号  
入場無料

（平和記念資料館 学芸課）

## ハンガリー等での ヒロシマ・ナガサキ 原爆展の開催

被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国際世論を醸成するため、広島市と長崎市は共同で、海外において「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しています。

平成三十年度はハンガリーの首都ブダペスト市、フランスのカーン市、そしてベルギーのイーペル市において、「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しました。

展示内容は、動員学徒として作業中に被爆し、犠牲となった中学生の焼けた水筒などの遺品や、佐々木禎子さんの折り鶴など、実物資料二十点のほか、広島・長崎の被爆の実相を説明したパネル三十点などです。

ブダペスト市の岩の病院・核の避難所博物館では、平成二十九年前半に引き続いて同年十二月二十日から平成三十年八月三十一日まで開催し、市民や観光客など約十一万三千二百人の来場がありました。

カーン市のカーン記念館で

は、平成三十年九月二十日から十月三十一日まで開催し、約一万人の来場がありました。

九月十九日には、開会式で広島平和記念資料館の志賀賢治館長らが挨拶を行った後、被爆体験証言者の梶本淑子さんが、地図や絵などで構成されたスライド資料を効果的に使用して証言を行いました。このほか、フランス国内の二か所でも被爆体験証言を行いました。



フランス・カーン市で被爆体験証言を行う梶本さん

ました。

十一月九日の開会式ではヤン・デュルネイーペル市長、林肇駐（はしむら）ベルギー特命全権大使、志賀館長らが挨拶を行いました。

また、ベルギー国内で四回実施した笠岡貞江さんによる被爆体験証言では、大学生や市民が熱心に証言に耳を傾け、証言終了後には、放射線の影響や被爆後の様子について笠岡さんへ質問が多く寄せられました。



ベルギー・イーペル市で被爆体験証言を行う笠岡さん

展示資料の見学や被爆体験の聴講を通して、核兵器廃絶や平和の尊さへの思いを深めていただくことができました。

（平和記念資料館 啓発課）

## ウェブ会議システム による海外への被爆 体験証言

被爆の実相を世界に



川崎宏明さんによる海外への被爆体験証言

平和記念資料館では、海外にも広く被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けての国際世論を醸成するため、インターネット回線で広島と海外を結び被爆体験証言を行う、「ウェブ会議システム」による海外への被爆体験証言を実施しています。

今年度は、核兵器保有国のアメリカを含む四か国九都市に対して、十回実施しました（平成三十一年三月一日現在）。聴講者からは、「一人一人の被爆者の個人的な体験に目を向けるこ

とができた」「過ちを二度と繰り返さないために今日の話を伝えたい」といった感想や思いが寄せられました。

新規で実施依頼のあった団体のほか、毎年実施依頼のある団体もあり、この活動は少しずつ広がり、また継続的なものになってきています。

当館は今後も、ウェブ会議システムなど様々なツール・媒体を活用して、国内外へ被爆の実相を伝えていきます。

(平和記念資料館 啓発課)

## 「国連見学ツアーガイドのヒロシマ研修」を実施 —ヒロシマの心を世界へ—

広島市では、長崎市と共同で、ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーンの国連施設に、被爆資料や写真、パネルなどで構成する常設の原爆展を開設しており、日々、各国政府の指導者をはじめ、世界中から多くの見学者が訪れています。

原爆展を通して、より効果的に被爆の実相を伝えるために



被爆体験講話の聴講

は、案内役のガイドやガイドツアー担当職員に被爆の実相を共有していただくことが不可欠です。このため、平和記念資料館では、国連三施設の見学ツアーガイドを広島に招へいし、被爆の実相を理解するための「国連見学ツアーガイドのヒロシマ研修」事業を平成二十九年度に開始しました。二回目となる三十九年度は、ガイド六人を対象に、昨年十二月一日から五日までの五日間、実施しました。

今回の研修は、初開催であった昨年度のプログラム内容を大きく見直し、広島でしか出来ない体験や、被爆体験証言者、ヒロシマピースボランティア

との交流を通じた知識、技術の会得に重点を置きました。内容は、講義の受講のほか、平和記念資料館の見学、慰霊碑や被爆遺構めぐり、被爆体験講話の聴講、ボランティアとの交流会、市内見学などです。

受講者からは、「実践的な内容が多く、ツアー参加者をガイドするという自身の実務に直結する学習ができた」との感想が寄せられました。また、複数の受講者から、「プログラムの中で被爆体験講話の聴講が最も印象に残った」との声が出ました。被爆者から直接話を聴く機会が今後ますます減少し、いずれは聴くことができなくなるとい



ボランティアによる慰霊碑解説



袋町小学校平和資料館の見学

緊張感と切迫感を持って聴講に臨み、講話後も積極的に質問する様子が見られました。

今後この事業を軸に、国連各施設における原爆被害に関する展示の充実や、各施設で行われるツアーでの被爆・核兵器廃絶に関する解説内容の拡充を図り、国際社会での「ヒロシマの心」の発信力の強化に努めていきます。また、国連との協力関係を強化・拡大し、国連施設でのイベントなど、共同事業の実施についても視野に入れていきたいと考えています。

(平和記念資料館 啓発課)

## 被爆体験伝承者から

おたかよし  
大田孝由さん（平成二十七年  
から活動）

私は一九四七年に広島市で生まれ、五歳の時に大阪へ引っ越しました。広島で被爆した母は、見知らぬ土地で、健康不安を抱えながらも、困窮していた家計を助けるために働いていました。幼かった私にも、その苦労は分かりました。母が亡くなった後、あらためて自分の人生を振り返った時、母に対して何一つ親孝行らしいことができなかつたことに悔いがありました。そんな折に広島市の被爆体験伝承者の募集を知り、早速応募しました。私が母に対してできる最大の親孝行は被爆体験を伝承することだと思ったからです。

偶然ですが、私は自分と同じ町の出身である榎本淑子さんの被爆体験を伝承しています。講話では話の内容を五つの部分に分け、太平洋戦争の初期・食糧難・集団疎開・原爆投下による被害の実相・榎本さんの被爆体験について話をします。



大田さんの講話の様子

梶本さんは女学生だった十四歳の時、学徒動員で働いていた工場で、作業中に被爆しました。自身も怪我をしましたが、よりひどい怪我をした友人たちを助け、担架で運びました。講話では、逃げていく途中で梶本さんが見た惨状を詳しく語ります。また、梶本さんのお父さんが、自らの二次被害を顧みず娘を探しに市内へ入り、奇跡のような再会を果たすことや、被爆後の療養の様子についても語ります。そして、被爆者としての体験に基づき梶本さんの平和に対する想いを、次世代の人に分かりやすいメッセージとして伝えます。

講話の内容が小学生から大人

向けであることを考えると、幼児向けの紙芝居的なものがある良いなと感じています。多くの皆さんから「聴いて良かった」、「あらためて戦争の怖さが分かった」、「二度と戦争をしてはいけないと思った」という感想をいただき、いろんな機会をとらえて、多くの世代を対象に講話をすることの必要性を感じます。

講話を実施した幼児から大人まで、皆さん熱心に聴いていただきました。ビデオや映画を見るのとは違い、語る表情や言葉の間などを細かい点まで感じていただいていることが良く分かりました。

講話は何回やっても慣れるという事はありません。いつも緊張します。伝承者として、「なぜ語るのか」、「何を伝えたいのか」を常に自問自答しながら日々活動しています。

### 大田伸一さん（平成二十七年 度から活動）

私は以前から広島県原爆被害者団体協議会のガイドとして平和記念公園で「碑めぐり」を通じて被爆の実相を子どもたちに

伝えていました。しかし、公園での案内では、多い時でも一クラス。もっと多くの子どもたちに一度に伝えるために、被爆体験伝承者になりました。また、被爆者が高齢化し、被爆の実相を次の世代に伝える必要があると感じていたことも理由の一つです。

私は新井俊一郎さんの被爆体験を伝承しています。新井さんは当時の時代背景を分かりやすく話してくださいました。直接被爆ではなく、後から広島市内に入って被爆した入市被爆者で、体には外傷がなく、「客観的に被爆体験を話されます。私の父も入市被爆者で、新井さんと同じような体験をしています。

新井さんは、本来なら、広島市内で「建物疎開作業」に動員されて亡くなっていたかもしれない中学生です。新井さんが通っていた学校だけが、爆心地から約二十キロメートル離れた東広島市に疎開中だったため、直接被爆をまぬがれました。しかし、八月六日、母校に報告書を届けるため広島市に入り、「運命的な」被爆を体験されました。私の講話では、新井さんの疎



伝承講話を行う大田さん

た人々の被爆の実相は、理解が難しいからです。

一時間の講話のうち約四十五分間は「聞く方にとってはとても長く、話す者にはとても短い時間だ」と、話す側に立ってみて、初めて感じています。スライド資料を見せながら解説し、来場者の視覚と聴覚に訴えています。「分かりやすかった」、「よく分かった」という感想を聞く、とても安心しますが、無反応の場合もあります。毎回、毎回が反省の連続です。

核兵器の恐ろしさは、まだまだ知られていません。できるだけ多くの方々に被爆の実相を伝えたいと思っています。できれば全県で講話を行いたいのです。核兵器をなくすため、戦争の防止や核兵器禁止条約の展望についても語りたいと思っています。核兵器禁止条約の理念が書かれた「前文」には、現在および将来の世代のため、平和・軍縮教育の重要性が盛り込まれました。伝承活動が平和教育の一環として重要な点をおもいます。銘じ、頑張りたいと思います。

講話では、できるだけ分かりやすく話したいと思っています。そのために、なぜ広島に原爆が落とされたのかということや、原爆の熱線、爆風、放射線による被害の実相の話をしてから、新井さんの体験を話していきます。特に、放射線が人体にどのような作用するかを話しておかないと、後から市内に入ってきた人や、市内に入っていない人も救護作業や死体処理作業をし

# 「姉妹・友好都市の日」記念イベント 市民が海外 文化を堪能

広島市は海外の六つの姉妹・友好都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を定めて、記念イベントを開催しています。二〇〇三年からは、この事業を本財団が市から受託して実施しています。各イベントの進行役は、広島市が市民に委嘱したヒロシマ・メッセンジャーが務めています。

## 重慶の日

昨年十月二十日（土）、広島市留学生会館にて記念イベントを開催しました。主催―平成三十年重慶の日実行委員会（日本中国友好協会広島支部や本財団など六団体で構成）

重慶市から贈られた菊の展示が来場者を出迎え、その後、来場者は中華菓子の月餅と麻花、ウーロン茶を味わいました。

開会セレモニーでは、実行委員長、広島市長が挨拶し、重慶市長から届いたメッセージが披露されました。

その後、ヒロシマ・メッセン

ジャーの李汶霖さんと常虹さんが重慶市の街の様子や食文化等について写真を使って分かりやすく紹介するとともに、重慶市に関するクイズや中国語のミニ講座を行い、会場を大いに盛り上げました。

記念ステージでは、日本中国友好協会広島支部の皆さんによる太極拳が披露され、来場者も一緒に優雅でゆったりとした太極拳の動きを体験しました。その後、プロの中国琵琶奏者であるティンティンさんによる中国琵琶の演奏が披露され、普段耳にする機会の少ない音色に来場者は、「素晴らしい演奏に感動した」、「音色に癒されました」と話していました。イベントの最後には、重慶市等から頂いた



ティンティンさんによる中国琵琶の演奏

中国関連グッズの抽選会を行いました。

約二百人の来場者は、様々な体験を通して、楽しみながら重慶市や中国への理解を深めました。

## ホノルルの日

昨年十一月三日（土・祝）、広島駅南口地下イベント広場で記念イベントを開催しました。主催―平成三十年度ホノルルの日実行委員会（広島日米協会や本財団など八団体で構成）

まず、来場者をフレーザーコーヒーとフルーツジュースでお迎えしました。

オープニングは、古典的なフラ「カヒコ」で始まり、その後、実行委員長、広島市副市長、ビデオによるホノルル市長の挨拶がありました。

続いて、ヒロシマ・メッセンジャーの畑井淳一さんと栗栖雅子さんが、会場の大型画面に写真を映しながら、ダイヤモンドヘッドなどのホノルル市の観光名所や日系移民の歴史を紹介しました。

次に、ハワイアンバンドとフラのステージが行われ、本格的な演奏と華やかなフラの演舞に

より、会場はハワイの南国ムードに包まれました。最後には、来場者も一緒に全員で「愛するハワイ」を合唱し、ハワイの雰囲気を感じてもらいました。会場内では、ハワイアングッズの展示販売やリボンレイの制作体験を行いました。

また、永年にわたり日米民間交流に貢献した人をたたえ、日米協会「金子堅太郎賞」を受賞された葉佐井博巳さんの紹介コーナーでは、授賞式の様子や広島六大学とハワイ大学野球チームとの交流の様子を展示し、葉佐井さんの永年の功績を紹介しました。

約六百人の市民が、ホノルル市について、楽しみながら理解



華やかなフラのステージ

を深めていきました。

（葉佐井博巳さんは平成三十一年一月二十六日に亡くなられました。八十七歳。故人のご功績を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます）

（国際交流・協力課）

## インドネシア地震被災者救援市民募金の実施

昨年九月二十八日、インドネシアのスラウェシ島中部を震源として発生したマグニチュード七・八の地震と、これに伴う津波により、死者、行方不明者は約七千人に及び、また、多くの被災者が出ました。

広島市と本財団は、その被害の甚大さを考慮して、人道的見地から、被災者救援のための募金活動を昨年十月二十五日から十一月二十八日まで実施しました。この呼びかけに対し、多数の市民、団体等から温かい募金が寄せられ、募金総額は六十八万三千四百九十円に達しました。

お寄せいただいた募金は、十二月五日に日本赤十字社へ送金しました。

（国際交流・協力課）



書道パフォーマンス

# 国際フェスタ2018 「ひろこう世界のとびら であおう世界のなかま」

平成三十年十一月十八日（日）、広島国際会議場、平和大通りの緑地帯などを会場に開催されたこのイベントは、十九回目を迎えました。

広島市や近郊で国際交流・協力活動をしている市民団体や企業七十団体が、異文化理解や地球環境、多文化共生、日本文化体験など三十八の多彩な事業を催し、延べ約一万二千八百人が来場しました。（主催―本財団。共催―独立行政法人国際協力機構中国センター、公益財団法人ひろしま国際センター、広島市）オープニングセレモニーでは、安田女子大学文学部書道学

科の学生による書道パフォーマンスが披露されました。今回設けられた国際フェスタのキャッチコピー「ひろこう世界のとびら」を力強く書き上げ、完成した作品に来場者から大きな拍手が起こりました。

## トークショー「セルジオ越後さんが語る、ブラジル日系人のことと、サッカーのこと」

ゲストスピーカーカーに、辛口でありながらユーモアのあるサッカー評論家、セルジオ越後さんをお招きし、ブラジル日系社会のことや、日本とブラジルの文化や暮らしの違い、スポーツを通じた国際交流などについて語っていただきました。

来場者は、セルジオさんのユーモアあふれるトークに時折笑い声を上げながら、普段聞けない話に耳を傾け、最後まで聞き入っていました。来場者からは、「スポーツを通じた文化交流、国際貢献の重要性や、ブラジル文化についても知ることができた」、「セルジオさんの日本への深い愛情を感じた」といった感想が寄せられました。

## 国際交流・協力活動の紹介

市民団体等活動紹介コーナーでは二十一団体が活動の紹介

ブースを設け、それぞれの国際交流・協力活動について紹介しました。市民団体のほかにも、公的団体、NGO団体、大学生、企業などがブースを設け、来場者は支援相手国の現況を聞いたり、民族衣装の試着や人力での水汲み体験をするなど、楽しく交流しました。また、青少年や大学生などによる国際交流・協力活動の発表や報告会、外国語のおはなし会も行われました。

## 外国文化・日本文化の紹介と体験

外国文化の体験では、スコットランドに伝わるキルトのデザイン作り、ケルト結び体験、中国の切り絵体験、中国結び（中国式組み紐）体験コーナーを催し、日本伝統文化の体験では、着物の着付け、茶道、いけばな、書道などのコーナーを催しました。外国人も日本人も、各国に伝わる文化を興味深く体験していました。

## 世界の料理と民芸品バザー

国際会議場南側の平和大通り緑地帯では、「ひろしま国際村世界の屋台」と称し、十八団体が世界の様々な料理を販売しました。また、「国際協力バザー」会場には十二団体が参加し、各

# 「姉妹・友好都市の日」 記念イベントで活躍 二〇一九年 ヒロシマ・メッ センジャー決定

広島市は、海外の六つの姉妹・友好都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を定め、各都市との交流の拡大と友好親善の促進を図っています。また、都市ごとに各二人、計十二人に「ヒロシマ・メッセンジャー」を委嘱しています。メッセンジャーは「姉妹・友好都市の日」記念イベントの企画・立案への参画、司会進行を行うなど、姉妹・友好都

国の民芸品などを販売しました。

このほか、広島市の姉妹都市ハノーバー市が推進する、世界の五千都市のアスファルトに残る軌跡を記録した写真展「50の都市―50の軌跡」、留学生の発表会、大人から子どもまで異文化体験を楽しめる地球ひろば、クラフト体験をしながら広島市の姉妹・友好都市について学べ



屋外ステージ

2019年ヒロシマ・メッセンジャー  
【活動依頼期間 本年1月1日～12月31日】

ホノルル市	森脇 透 (もりわき とおる)	木村 留美 (きむら るみ)
ボルゴグラード市	クロット アンドレイ	クロット 奈未 (くろつと なみ)
ハノーバー市	秋丸 直人 (あきまる なおと)	加藤 アグネス (かとう あぐねす)
重慶市	羅 明涵 (ら めいかん)	劉 丹 (りゅう たん)
大邱広域市	谷川 穂乃果 (たにかわ ほのか)	長本 美緒 (ながもと みお)
モントリオール市	山本 主税 (やまもと ちから)	飯村 徳穂 (いいむら とくほ)

市について市民の理解を深める活動に携わります。  
(国際交流・協力課)

るコーナー、世界の舞踏や音楽

を披露する屋外ステージ、世界の  
のコインを寄贈し開発途上国  
の子どもたちを支援するコー  
ナー、イベント会場を回ってク  
イズに答えるクイズラリーなどがある  
らえるクイズラリーなどがあり、  
各会場は大いに賑わい、参加  
者は国際交流・協力について  
理解を深めていました。

また、このイベントには、多  
くの市民や留学生がボランティア  
アスタップとして参加し、一緒  
に盛り上げていただきました。  
参加した外国人も日本人も、  
世界各国の文化に触れる一日と

なりました。

(国際交流・協力課)

### JICAサロン 「余熱の会」シ ニア海外ボラン ティア@タイ」

一月二十七日、広島国際会議  
場国際交流ラウンジを会場に、  
(独)国際協力機構(JICA)  
中国との共催で、平成三十年  
度第三回JICAサロン「余熱の  
会」シニア海外ボランティア  
@タイ」を開催しました。

## 平成三十年七月 広島県豪雨災害 義援金について

広島県では、平成三十年七  
月五日からの豪雨により、土  
砂災害や浸水被害、ため池  
の被災等が発生し、多くの  
方が被災され、死者百八人、  
行方不明者六人、重軽傷者  
百二十七人(平成三十年八月  
十三日現在)に及びました。  
本財団は、被災者への援護  
の一助として、広島県及び日

本赤十字社広島県支部等に協  
力し、平成三十年七月二十四  
日から平成三十一年六月  
二十八日まで、本財団が管理  
する平和記念資料館、国際会  
議場、原爆死没者追悼平和祈  
念館に募金箱を設置し、義援  
金の受付を行っています。  
この呼びかけに対し、多数  
の来館者から支援が寄せられ、  
二月二十二日現在、募金総額  
は十一万二百円に達しました。  
お寄せいただいた義援金は  
日本赤十字社広島県支部の口  
座に振込みました。

(総務課)



講師の二井田さん

今回の講師は、二〇一六年か  
ら二年半、タイのバンコクにあ  
る泰日工業大学工学部に赴任し  
た二井田弘男さんです。

泰日工業大学は、タイから日  
本への元留学生が二〇〇七年に  
設立した大学で、日本型のもの  
づくり教育を導入しています。  
学生全員に日本語教育を行い、  
多くの卒業生が日系企業に就職  
しています。この大学で二井田  
さんは、自身の自動車メーカー  
での勤務経験を生かし、「工作  
機械」という職種で、「ものづ  
くり教育」コースの設置と発展  
を目指して活動されました。

二井田さんから、写真を交え  
ながら授業風景やキャンパス内  
の様子などを説明していただ  
き、学生たちが生き生きと学ぶ  
姿はとても印象的でした。

### 「世界を知ろう」 「Have a Natter」 の開催

毎月第四水曜日(原則)に  
広島国際会議場国際交流ラウ  
ンジで、「世界を知ろう」と  
「Have a Natter」を開催して  
います。

#### 「世界を知ろう」

海外出身者を講師に招き、  
出身国の紹介や、テーマに  
沿ったお話をしていただきま  
す。これまで、広島市の姉妹  
都市で平和首長会議の加盟都  
市であるカナダ・モントリ  
オール市からのインターンの  
方に、同市の平和の取組を紹  
介していただきました。

### 「Have a Natter」

国際交流・協力課で勤務し  
ているイギリス出身のマー  
ク・マクフィリップス国際  
交流員と参加者が、自由な会  
話を通して交流を楽しみま  
す。使用言語は、奇数月は英  
語、偶数月は日本語です。ま  
た、希望者には個別相談を  
行っています。

#### 【実施日時】原則毎月第四 水曜日、「世界を知ろう」

13:30 ~ 14:15、「Have a  
Natter」14:15 ~ 15:45  
※要予約・各先着十人  
【お問合せ先】  
国際交流・協力課  
☎(082)242-8879

また、タイの魅力についても  
話してくださいました。一番の  
魅力はやはりタイの人々の人柄  
で、仏教の「タンペン」(徳を  
積む)の教えを大切にし、明る  
く、温厚な人が多いそうです。  
五つの世界遺産を有し、豊かな  
自然にも恵まれたタイの魅力に  
ついて、実際に二井田さんが訪  
れた時の写真を見ながら伺いま  
した。普段あまり見る機会がな  
いタイの地方都市の風景は、興  
味深いものでした。

そして、もう一つ外せない魅

力が食文化です。日本でおなじ  
みのタイ料理は言うまでもな  
く、果物やお菓子など、とにか  
く美味しいものが多かったそう  
です。  
タイは日本でもよく知られた  
国ですが、今回、二井田さん  
のお話しを通して、新たなタイ  
の魅力に触れることができました。  
また、泰日工業大学のお話  
から、日本とタイのつながりや  
友好関係を知り、タイをより身  
近に感じることができました。

(国際交流・協力課)



核絶対否定  
春子 森瀧

プロフィール

〔もりたき はるこ〕

核兵器廃絶をめざすヒロシマの会・共同代表(2001～)、核兵器廃絶日本NGO連絡会・共同世話人(2010～)、NO DU(劣化ウラン弾禁止)ヒロシマ・プロジェクト・事務局長(2003～)、ウラン兵器禁止国際連合(ICBUW)・運営委員(2004～)、世界核被害者フォーラム・事務局長(2014～)、広島大学非常勤講師(2015-2016)。広島平和文化センター評議員。2018年、谷本清平和賞受賞。

平和について思う

核絶対否定の真理の共有を

核兵器廃絶をめざすヒロシマの会  
共同代表 森瀧 春子

核兵器を国際法で禁止する核兵器禁止条約が二〇一七年七月に国連で採択されて以来、その発効までの生みの苦しみが続いています。また、新たな国際緊張の中で核戦争の危機は高まり、核をめぐる状況は極めて厳しくなっています。このような時期に、原爆、核被害の実態をさらに明らかにする調査研究の追求と継承が、色々な分野で試みられています。被爆者若者、研究者、反核運動に携わる人々、被爆地の行政が連携し、地道に活動していく中で、その担い手・継承者が育まれていくことこそ、「ヒロシマ」に期待されています。

核開発時代がもたらしてきたものは、ウラン鉱山開発、核兵器製造、世界各地での核実験による核被害、原爆が実用された核戦争。人類史上未曾有の非人間的悲惨の極みをもたらしてきました。同時に核は、エネルギー源としての原発によって大事故を引き起こし、取り返しのつかない核被害をもたらしてきました。核兵器や原発用に濃縮されたウランの残滓までが、劣化ウラン兵器として戦場で使用され続け、被害を拡大しています。人類が作り出した負の遺産に終わりを告げるためには、まず、「現実」を明らかにすることが力となります。

世界中から、核実験をはじめ、あらゆる核の被害者が広島に集い、被爆七十周年に開催した「世界核被害者フォーラム」で、「世界核被害者人権憲章」を発したのも、その努力の一つです。核戦争の被害地に課された重い責任があるゆえでした。被爆後、広島の人々・被爆者は、「核と人類は共存できない」、「人類は生きねばならぬ」との理念に、その未曾有の非人間的悲惨の被爆体験から到達し、反核の闘いを担って来ました。「核を絶対に否定する」とは、現実的には「核兵器を廃絶する」、「原発を廃絶する」ということです。私自身もヒロシマ・ナガサキから七十四年目を迎える今日まで、その実現のために懸命に闘いながらも、時には絶望的に遠い目標だと感じることもありました。

しかし一九九九年の対人地雷禁止条約、さらに二〇〇八年のクスター爆弾禁止条約が、市民と志のある国々の連携で実現するのを見届けた時、「これだ！核兵器も劣化ウラン爆弾も、このプロセスで廃絶していけばいいのだ」と確信しました。二〇〇九年以来非人道兵器である「劣化ウラン兵器禁止条約を」と、「核兵器禁止条約を」とヒロシマから国内外に訴え、国際法で法的に禁止する運動を進めてきました。二〇一三年のオスロ、二〇一四年のメキシコに続く、二〇一四年十二月のウィーンでの第三回目的「核兵器の非人道性を問う国際会議」には私も参加しました。ウィーン会議では非人道兵器・核兵器の法的な禁止を、という流れが大 きくなり、明確化し、市民社会と有志国が連携した進め方は、まさにクラスター爆弾禁止のプロセスを踏まえるものであり、私は新たな確信と希望を得て、核を国際法で禁止し、葬り去るため力を振り絞ろうと決意をもって帰国したのでした。